

平成31年3月1日（卒業式式辞）

「旅立つ71回生へ はなむけとして」

万物のいのち煌めき立つ春三月。ここあやめが丘から、77名の若人が洋々たる未来向かって飛び立とうとしています。

この門出にあたり、本校ゆかりのご来賓の皆様方、並びに保護者の皆様方のご臨席を賜り、長崎県立口加高等学校の栄えある第71回卒業証書授与式を挙行できますことは、大きな喜びであり、心からお礼申し上げます。

はじめに、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございませう。背中よりも大きなランドセルを背負って小学校に入学したあの日。いつしかあの子がこんなに凛々しく立派に成長しました。早朝からのお弁当作り、汚れた体操服や練習着の洗濯、登下校の送り迎え、病気や怪我の時の看病……。言うことを聞かないわが子に腹を立て、親として悩み、苦しめたこともあったことでしょう。18年間の子育て、本当にお疲れ様でした。今日は、保護者の皆様の卒業式でもあります。卒業証書は、子どもたちの3年間の努力の証明書でもあり、子どもから親への感謝状でもあります。これまでのご労苦に深甚の敬意を表したいと存じます。

さて、3年生の皆さん、卒業おめでとう。期待と不安で口加高校の正門をくぐった入学の日。あれから3年の月日が流れました。今、何を思い、そこに座っているでしょうか。まだ夜も明けきれぬ早朝から通学した日々、外が暗くなるまで教室や廊下で励んだ勉強、仲間と共に汗し、励まし合った部活動、優勝を目指して一致団結した体育祭。笑顔もありましたが、人知れず流した涙もあったと思います。その一つ一つを超えて、皆さんは今ここにいます。

卒業式は高校生活のゴールでもあり、新しい人生のスタートでもあります。これまでの18年間は、あらかじめ決められた道を歩んできたようなものです。しかし、これからは違います。皆さんの前には手つかずの荒野が広がっています。道は自分で作っていかねばなりません。どこに向かってどんな道を作るのか、自分で決めることができます。人生にはマニュアルはありません。正解もないのです。しかし、一つだけ確かなことがあります。それは、高校時代という時間が2度と戻らないように、人生は「時間」という乗り物に片道切符で乗っているようなものだ、ということです。その時間をどう使うのか、それも自分で決めることができます。ある女性グループはこう歌っています。「人生は紙飛行機。その距離を競うより、どう飛んだか どこを飛んだかが一番大切」。どこをどう飛ぶのかという人生のシナリオを描くのも、主人公も自分です。他人との比較ではなく、私らしく、幸せな人生のストーリーを描いてください。

「しあわせはいつも自分の心が決める」相田みつをさんのことばです。幸せは巨万の富や名声を得ることではありません。本当の幸せは、インスタ映えするような

華やかな世界ではなく、日常の温かさの中にこそ輝いています。それを感じるかどうか、皆さんの心が決めるのです。これから人生のシナリオを描く77名の皆さんへ、はなむけの言葉として私から最後のメッセージを贈ります。

これから皆さんが生きていく時代は先行き不透明と言われていています。しかし、歴史は常に「不透明で困難な時代」の繰り返しです。歴史上、「透明で容易な時代」があったのでしょうか。我が国の近代以降の歴史を振り返っても、開国から明治維新、太平洋戦争、戦後復興など幾多の変革期があり、先人たちは「不透明で困難な時代」をたくましく生き抜いてきました。明治維新からまだわずか150年しか経っていません。我が国で約700年間続いた武家政権を終わらせ、近代化の礎を築いたのは他でもありません。地方出身の名もなき若者たちでした。彼らを突き動かしたものは何か。それは「私はこういう生き方をしたい」とか「こういう社会を創りたい」という理想と青雲の志であり、逆風にも歯を食いしばって突き進んだ勇者たちのエネルギーでした。

今、日本でも「私に何ができるか」を考え、勇気を持って行動する若者たちがいます。性的少数者や外国人留学生を支援する団体を発足させた学生。女性を蔑視する週刊誌の記事に抗議を呼びかけた学生。国会前で声を上げる学生。またスコップを片手に地震や豪雨の被災地にボランティア活動に向かう若者たちもいました。被災地で黙々と働く漁師さんや主婦の姿を見て、ボランティアの大学生はこう語りました。「大人たちの使命感を感じ、震える思いだった。」勇気を持って、一歩踏み出すことで、見える景色があります。

これからの時代を生きる皆さんに大切にしてもらいたい言葉があります。それは「多様性」です。私たちが生きている社会は多様性に溢れています。多種多様な生き物、人種や言語、宗教、価値観、生き方……。みんな違ってみんないいんです。しかし、残念ながら、今、私たちの心には「分断」が進み、生きづらく、ものが言いつらい社会になっているように感じます。社会は多様で、複雑です。賛成か反対、好きか嫌い、敵か味方という二者択一ではありません。世の中は白か黒で成り立っているわけではありません。カラフルで多様な色のグラデーションでできています。その多様性の中で「私」という個性が輝いています。しかし、現実はどうでしょうか。同じ意見は褒める。異論は遮断するか、攻撃する。特に「怒り」や「嫌悪」という負の感情が、バッシング、ハラスメント、いじめ、ヘイトスピーチ、炎上などの極端な行動へと駆り立てていないでしょうか。

どうか皆さん、外に出て、人とつながり、多様な価値観と生き方に触れる経験をしてください。ネット情報に振り回されず、スマホから顔をあげて生身の人間と話をしてみてください。スマホやパソコンを通じたやり取りだけでは分からない多様性に気づくことでしょう。みんな違ってみんないいんです。自分とは違う価値観に思いを巡らせ、対話し、理解しようとする寛容さの先にこそ、多様な彩りに満ちた

社会の実現があると信じます。

どんなに AI やロボットが台頭する時代が来ても、最後はモノではなく人です。人を大切にする社会を創りましょう。そのために人と人の中には「壁」を築くのではなく、「橋」をかける人になってください。「馬鹿野郎」と言えば「なんだこの野郎」としか返ってきません。怒りは怒りを、憎しみは憎しみしか生みません。それが「壁」です。しかし、笑顔で「ありがとう」と言えば笑顔で「どういたしまして」と返ってきます。それが「橋」です。進んで人と人をつなぐ「橋」を作る人の元には自然と多くの人が集まるようになっていきます。そして、その人たちが、皆さんの人生を豊かで彩りに満ちたものにしてくれるのです。

名残は尽きませんが、いよいよお別れの時が近づいてまいりました。間もなく実家を離れ一人暮らしを始める人もいます。「人は、帰る場所があるから、遠くまで行ける」と言います。歌手のさだまさしさんが「案山子」という歌を歌っていらっしゃいます。我が子を遠くに出した親の気持ちを歌った歌です。冒頭はこんな歌詞です。「元気であるか 街には慣れたか 友達出来たか 寂しくないか お金はあるか 今度いつ帰る」これが遠くに我が子を出す親の親心です。皆さん、どうか忘れないでください。いつも我が子を案じ、帰りを待ち詫びている父や母がいることを。どうか思いを馳せてください。西の空に沈む太陽は、今日もふるさとの空も赤く染めていることを。どうか思い出してください。ここにいる仲間たちは、この空のどこかで今日も懸命に生きていることを。そして、どうか誇りにしてください。この口加高校が 皆さんの母校であることを。

以上が私から皆さんへの最後のメッセージです。昨年の春から1年間の付き合いでした。最高学年として口加高校をリードしてくれて、本当にありがとう。みんな元気で。胸を張って堂々と生きていってください。以上、式辞といたします。

平成31年3月1日 長崎県立口加高等学校長 狩野 博臣